

## 戦後広島駅前ヤミ市の出現とその変遷過程

- 駅前の整備・再開発・活性化事業に関する史的研究 -

THE APPEARANCE OF THE BLACK MARKET IN FRONT OF HIROSHIMA STATION  
AND ITS CHANGING PROCESS AFTER WORLD WAR II

- A historical study about a station square adjustment, redevelopment and a project of revitalization -

李 明\*, 石丸紀興\*\*

Li MING and Norioki ISHIMARU

Considering the appearance and the change process of the postwar black market in front of Hiroshima station, we are going to give new information about a station square adjustment, redevelopment and revitalization project. Right after World War II, black markets were appeared in many urban cities in Japan, as well as Hiroshima, especially in front of the Hiroshima station there was a bustling big scale black market. Even though Hiroshima was atomic bombed, people were doing business in the black market and it effected very much to revitalization of Hiroshima. Although this hasn't mentioned so much until now, it is indispensable to talk about the restoration process of Hiroshima. Considering the station square black market in Hiroshima is not only important to thinking about the restoration process of war damage in atomic bombed city Hiroshima but also it can give you the important information to having a grasp of the history of Japanese war damage restoration more in general.

**Keywords:** World War II, Hiroshima, Before a Station, Black market, Changes, Maintenance

戦後、広島、駅前、ヤミ市、変遷、整備

## 1. はじめに

本稿は、諸文献と調査を通じて、戦後広島の駅前ヤミ市<sup>1)</sup>の出現やその変遷過程について考察することにより、駅前整備、再開発、活性化事業に新しい情報を提供しようとするものである。

日本は昭和20年8月15日に世界第二次大戦の終戦を迎え、その直後から日本の多くの都市に闇市といわれるものが出現した。被爆都市広島市においても例外ではなくヤミ市が市内数カ所に出現しており、特に広島駅前には大規模なヤミ市が形成され賑わった。広島が被爆して市街地の大半は廃墟となり、多くの人が傷付き亡くなり、あるいは被爆の後遺症に悩まされ、終戦となって打ちひしがれたようになっていても、ヤミ市ではたくましくも商売が営まれ、多くの顧客を集めていたことになる。これらは被爆都市広島市の活性化に大きな役割を果たし、広島の復興過程を語る上で欠くことのできない存在であったが、これまでほとんど言及されてこなかった。今回調査を行い、広島都市生活研究会から貴重な資料を提供され、広島駅前ヤミ市に関するいくつかの情報が明らかになった。

広島の駅前ヤミ市を考察するのは、被爆都市広島の戦災復興過程を考える上で重要であるだけでなく、日本の戦災復興史をより総体として把握する上でも重要な情報の提供になるだろう。

戦後復興過程に関しては、既に戦災復興都市計画や戦災復興都市計画事業の側からある程度の成果を蓄積している。ヤミ市の研究に関しては、松平誠らの池袋や新宿を対象とした先進的な研究<sup>2)</sup>があり、

多くの成果が蓄積されている。本稿はこれらにも多く負った。

## 2. 駅前ヤミ市の出現

## 2-1. 戦前から終戦直後までの広島駅前の状況

まず、ヤミ市の立地基盤となった広島駅前の状況についてまとめておきたい。明治27年6月に山陽鉄道が広島まで開通し、その直後に日清戦争が勃発して以来、広島駅は軍部の機能として欠かせないものとなった。広島駅の立地した場所は松原町で、その付近は山陽鉄道が開通するまでは広島の郊外であり、西国街道沿いのみ市街地が連担していた。猿猴川に架けられた猿猴橋の東詰めからは東照宮への参道がほぼ直線状に伸びていて、その猿猴橋に近い部分は松原通り（あるいは東松原通り）と呼ばれていた。広島駅が立地してからは、広島駅と中央部の繁華街が大正元年に路面電車網によって結ばれ、駅付近も賑わいを見せるようになってきた。昭和初期の松原通りを撮影した写真<sup>3)</sup>によれば、通り両側に松並木が続き、牧歌的な様相を呈していた。なお、広島駅の駅舎は大正11年11月に建設され、その広場の西側には駅前郵便局が置かれた。昭和12年になると広島駅と駅前郵便局付近も景観的に変化が生じ、郵便局の駅寄りに広島物産館陳列販売所が立ち塞がるように建てられていた<sup>4)</sup>。図1は大正15年12月に広島市都市計画課が作成した1/2500の地図に、昭和3年7月に決定された都市計画街路線を書き込んだものである。その時広島駅前に関連して決定された都市計画街路は、主要な部分の幅員が22メートル、路

\* 広島国際大学工学部建築学科 博士(工学)

\*\* 広島国際大学工学部建築学科 工博

Department of Architecture, Faculty of Eng., Hiroshima International Univ., Dr. Eng.  
Department of Architecture, Faculty of Eng., Hiroshima International Univ., Dr. Eng.

線番号 1-3-12 の広島駅前線であった。この広島駅前線は昭和 10 年度から事業着手となり、荒神橋の架設や電車通りの 22 メートル化、駅前広場の拡張が進められた。事業の過程で駅前広場は当初計画の 6200 平方メートルから 9860 平方メートルに計画変更された。しかし、この街路と駅前広場は完成を待たずに被爆に遭遇することになるのである。広島駅は爆心地から約 1850 メートルの距離であるから、駅前付近は全壊・全焼の区域に含まれていた。鉄筋コンクリート・鋼鉄トラス構造の広島駅はほぼ全壊全焼し、爆風と火災によって建物内部の吹き抜けの待合室やコンコースの部分も、二階を有する事務室部分も、屋根は吹っ飛び天井が落下し、構造体だけを残して燃え尽きたのである。建物の正面の添柱や間柱も部分的に欠け落ち、窓ガラスは皆無の状況であった。しかし被爆後直ちに復旧作業が施されて数日の内に輸送機能だけは回復させ、4 日後には駅舎の前面にバラックの駅事務室が建てられたという。

終戦ともなると広島駅は国内で移動するために切符を求める行列、疎開地から帰る人、兵役を解かれて帰る復員兵（者）、後には引揚者などで混雑した。このような広島駅付近の状況が、ヤミ市出現の背景であった。被爆後しばらくしての広島駅舎と駅前広場の状況は写真 1 と写真 2<sup>5)</sup> のようになるが、昭和 20 年 11 月ともなれば瓦礫が取り除かれ、仮設の待合室も設けられている。



図 1 戦前の広島駅前付近の市街地と都市計画街路

## 2-2. 駅前ヤミ市の出現時期

ヤミ市が広島駅前に出現したという記録はいくつかあるが、最も大々的に報道されたのが、昭和 20 年 12 月 4 日付中国新聞においてであった。新聞には「闇市のぞき」の見出しと写真の記事が掲載された。これが広島駅前にヤミ市が出現したことの決定的な証拠となり、現在でもヤミ市の原風景として記憶されている。この時の記事は、ミカン、ウドン粉饅頭、軍用毛布といった品物が売られていることに触れ、その活気や賑わい、雑踏といった売買風景などとともに、「百円札は着て寝られぬ」「主人（の収入）だけでは食えぬ」といったヤミ市で売買して生活をせざるを得ない立場とヤミ市の存在理由が記述されている。こうしてヤミ市が、遅くとも昭和 20 年 12 月初旬には広島駅前に存在していたことが確認できるが、果たしていつ出現したのだろうか。改めて文献類を検討して見ると、戦後の早い時期に出現したことを記述している文献として『新編広島県警察史』がある。その中で

上田頼一東警察署長による手記「青空市場顛末記」において、終戦後早くも「鈴木某が駅前広場に逸早く手荷物預所を造って昼夜社会奉仕を初めた。誠にそれは繁昌した。八月下旬から其の周囲に 1 軒出し 2 軒出すと云う調子で露店がだんだん増えて行った」<sup>6)</sup>とあり、8 月下旬に露店のヤミ市が形成されたと述べていて、ここに 8 月説が確認できる。また中国新聞記者大佐古一郎による日記『広島昭和二十年』の 8 月 30 日の欄で広島駅前のヤミ市を取材したことに触れており<sup>7)</sup>、8 月下旬の遅くとも 30 日にはヤミ市が出現していたことは明白である。従って、ここでも 8 月 30 日の少し以前説を確認できる。さらに、10 月 6 日にはヤミ市風景を取材したことをやや詳しく記述しているので、この時期に 5、60 店のヤミ市と 10 余の屋台が出現していたことも確認できる。

表 1 広島駅前ヤミ市の出現期日の記述のまとめ（記録・出版順）

出現期日	著者と出典	出現期日に関連した記述の引用
昭和 20 年 8 月 30 日 10 月 6 日	大佐古一郎『広島昭和二十年』（日記はそれぞれの日付、出版は昭和 50 年）	「8 月 30 日…午後、県行員に借りた自転車に乗って、広島駅前の闇市と市内のバラックを取材に行く。」(P.217) 「10 月 6 日…広島駅前の闇市へ買物をおかねて取材に行く。駅前の闇市は九月の初めごろから横川駅前と相前後して出現したが…」(P.238)
昭和 20 年 12 月 4 日より少し前（上旬）	昭和 20 年 12 月 4 日付中国新聞	「闇市のぞき」の記事と写真から、その前日以前に写真が撮られたことになり、その真の正確なヤミ市が存在していたことになる。
昭和 20 年 11 月 20 日	竹内鋭「廢墟に立てば去り難し」（『月刊中国』昭和 21 年 8 月号）	「生鮮食品品の新鮮な廃墟と（昭和 20 年 11 月 20 日）忽闇市が出現し、通貨も制限して…」(P.15)
昭和 20 年 8 月下旬	上田頼一「青空市場顛末記」（『新編広島県警察史』の発行は昭和 29 年）	「鈴木某が駅前広場に逸早く手荷物預所を造って昼夜社会奉仕を初めた。誠にそれは繁昌した。八月下旬から其の周囲に一軒出し二軒出すと云う調子で露店がだんだん増えて行った。」(P.961)
終戦後二、三日過ぎ去って 8 月 19 日頃と推定	『広島原爆戦災誌』第 2 巻（昭和 46 年）	「八月十五日、終戦となり…人々は深い虚脱感に陥った。二日、三日はただ茫然として過ぎ去ったが、早くも広島駅前には商人があらわれた。」(P.324)
終戦三日目頃から 8 月 18 日頃	『広島原爆戦災誌』第 2 巻（昭和 46 年）	「早くも終戦三日目ごろから、広島駅前付近に…闇商人が現れ、…」(P.9)
昭和 20 年 8 月末	『広島新史』市民生活編（昭和 58 年）	「広島市では、原爆投下から間もない昭和 20 年（1945）8 月末から、また海野原であった広島駅前に闇市が立ちあがった。」(P.10)
昭和 20 年 8 月 18 日	『広島新史』経済編（昭和 59 年）	「その廢墟の市内各地に、いち早く再生したのが『闇市』といわれる露店の自由市場であった。このような『闇市』は、敗戦後 3 日目には、はやくも出現したといわれるが…」(P.30)

その後の、ヤミ市の存在を記録した資料として『広島原爆戦災誌』第 2 巻があり、これによると「八月十五日、終戦となり、これまで社会を支えていた権力や機構が一朝にして瓦解し、人々は深い虚脱感に陥った。二日、三日はただ茫然として過ぎ去ったが、早くも広島駅前に商人が現れた。ムシロを地べたに敷き、その上に商品をならべた。」<sup>8)</sup>となっており、また「早くも終戦三日目ごろから…」<sup>9)</sup>という記述がある。これによって、ヤミ市の出現時期を 8 月 19 日頃説、あるいは 8 月 18 日頃説として捉えることができる。次いで『広島新史』市民生活編では八月末説としているが、『広島新史』経済編においては「被爆によって市中心部の商業活動は、ほとんど完全に壊滅した。その廢墟の市内各地に、いち早く再生したのが『闇市』といわれる露店の自由市場であった。このような『闇市』は、敗戦後三日目には、はやくも出現したといわれるが、…」<sup>10)</sup>のように伝聞形式ながら、8 月 18 日説を採用している。このように、ヤミ市の発生時期に関してのいくつかの記述があり、これらを記録・出版時期順に【表 1】にまとめると、昭和 20 年 8 月中旬を発生時期とする記述は『広島原爆戦災誌』以後の二次資料から始まっていることがわかる。「二日、三日…」という表現を言葉の綾と捉えるか、正確な数字として受け取るかで多少のずれは生じるが、いずれにしても「8 月中旬」説はどのような資料によってその発生時期を特定したのかという実

証過程の提示がない限り、本稿では一次資料である上田頼一東警察署長の手記「青空市場顛末記」による「八月下旬」説、中国新聞記者大佐古一郎の日記『広島昭和二十年』による「八月三十日の少し以前」説を発生時期と捉えておくこととする。

ヤミ市は広島駅前の他に横川、己斐、天満橋、宇品でも発生するので、それらについて別途検討が必要であるが、広島駅前のヤミ市が戦後最も早い時期であったかどうかについては次の記述が存在することに触れておこう。それは、『広島原爆戦災誌』第二巻の己斐地区の項で、「復興するの他地区より早かった。西玄関として省線己斐駅・広島電鉄郊外線西広島駅、及び市内電車の終着点であったから、地方からの乗降客で混雑した。これら駅付近の広場にできた露天の闇市場は、連日利用者が活気を呈した。露天式闇市場は、この地区に出現したのが広島駅前よりも早く、市内でいちばん最初ではなかったかと言われる。」<sup>11)</sup>とあり、広島駅前よりも己斐駅付近でのヤミ市の出現が早かったとされるが、同じ「原爆戦災誌」の中で「早くも終戦三日目ごろから広島駅前付近に…闇商人が現れ…」<sup>12)</sup>と記述しているのであるから、己斐駅付近でのヤミ市の発生を広島駅前よりも早いとする説にも無理があり、決定的なものではない。全国的には神戸や新宿におけるヤミ市の発生が最も早いとされている。神戸については、昭和20年11月26日付中国新聞に「闇市場、元祖は神戸の中華人、資源の供給路は広島地方」という見出しで、「中華民国人が、終戦と同時に中華の旗を胸にバッヂの如くつつ(原文ママ)つけ、『我等は戦勝国民なり』と神戸から三宮へのガード下に…シューマイ、ぜんざいなどを売り出し、日を逐うにつれ白米のライスカレー、焼めしなど主食品へ移行し、…」<sup>13)</sup>と報道し、続いて大阪でも「九月下旬頃からぼつぼつ姿を見せはじめ」と付け加えている。具体的な期日は不明であるが終戦直後という表現から8月中旬あるいは下旬も20日に近い日であろう。東京では終戦から3日目の8月18日に関東尾津組が都内主要紙に広告を出して新宿マーケット開設のきっかけを作り、早くも20日に露店の新宿マーケット(通称尾津マーケット)が開店しており、それに引き続く形で都内の国電主要駅周辺にヤミ市が形成されていったとされる。このようにみれば、まず神戸や新宿などで先陣を切ってヤミ市が出現し、次いで全国的にも多くの都市で多少の差異はあるが終戦後の早い時期にヤミ市が発生しており、それはまさに必然的な成り行きのものであり、自然発生的ともいえる状況であった。ちなみに、全国的に大規模とされるのが神戸三宮の高架下、東京上野のアメ横、大阪梅田駅前に形成されたヤミ市であった。

### 3. ヤミ市の立地場所の変遷と時代区分

#### 3-1. 第一期 自然発生的駅前広場露店ヤミ市時代

広島駅前にヤミ市が出現したことは明確な事実として、どの場所にヤミ市が発生したのであろうか。昭和20年12月上旬に中国新聞社が撮影し新聞紙上に掲載した写真と「昭和二十年十二月十二日」<sup>14)</sup>の書き込みのある朝日新聞社所蔵の写真(写真3)から判断すると、図2に示す付近に立地していたと想定できよう。背景に広島駅舎が写っており、駅前広場内であったことは疑いない。ただし、厳密に広場のどの範囲にヤミ市が立地していたかを示す決定的な資料が現段階では見当たらず、また恐らく日によって立地形態も異なっていたと思われるので、おおよその区域しか図示することができない。この時期は戸板やよしずの上に品物を並べた明らかに露天での店であり、店舗と

はいえないような粗末な設備であった。このようなヤミ市は、終戦直後(昭和20年8月下旬には確実に)から始まる第一期として「自然発生的駅前広場露店ヤミ市時代」と称することができよう。もちろん立地場所は不法占拠であった。これらのヤミ市には、多くの市民が生活必需品を求めて群がったのであり、後述するように昭和21年1月上旬までを、時期区分することができる。ところで、ここで一つ謎が生じる。被爆後しばらくしての広島駅舎と駅前広場の写真はかなりの枚数に上るが、ヤミ市を撮影した写真が現段階では写真3と昭和20年12月4日付「中国新聞」の掲載している写真だけしか見当たらないことである。それはすなわち、ヤミ市そのものを撮影した写真が稀少なことはなぜかという疑問と、昭和20年8月下旬には出現したのであるから、同年9月や11月といった時期に広島駅方向を撮影した写真1、2にヤミ市が存在していなければならぬはずであるが、見当たらないのはなぜかという疑問とに行き着く。その後者の疑問に対しては、撮影されたのが早朝でヤミ市の営業開始前の時間であったか、あるいは撮影日がたまたまヤミ市の立たない日であったと推測される。もう一つの前者の疑問への解釈として、この期に限らず以後もヤミ市の写真が極めて少ないことと関連するが、当時、ヤミ市を写真として撮ろうとする動機が希薄であったか、あるいはヤミ市の撮影を抑制するに<sup>15)</sup>かか作用したのではないかという仮説が立てられる。積極的にヤミ市を撮影しようとしたのは特殊な場合に限られたのであろう。とはいえ、推測や仮説は依然として実証されていないことも、断っておかねばなるまい。写真1は、ピーターソンが昭和20年9月から11月にかけて撮影したもので<sup>16)</sup>、駅前付近はまだ瓦礫の残る状況にあり、建物の再建はわずかである。その中で駅前広場として拡張するために終戦前に買収された元民有地に規模の大きい三棟の建物が建てられているのが目立つ。写真2は、同年11月頃の佐々木雄一郎撮影のもので、駅舎の窓は破壊されたままで、その前面に破壊された駅舎の機能を補完するバラックが建てられ、広場の中の壁のない建物は手荷物預かり所と思われ、人だかりもしており、今にもヤミ市商売が始まってもよい雰囲気であるが、早朝のためかヤミ市は見当たらないのである。写真3は、当時のヤミ市風景である。

#### 3-2. 第二期 民有地集団移転・一部駅前広場再集中ヤミ市時代

当初、ヤミ市は、問題があるとしても市民に必要な存在であり、政策的にもヤミ市黙認あるいはヤミ市放任であったが、昭和21年になるとやや様相を異にする事態が現れた。まず、1月10日における米国陸軍長官パターソンの広島被爆の視察が一つの転機となった。この時の状況は上田頼一東警察署長の「青空市場顛末記」に記述されており、これには「(パターソンアメリカ陸軍長官の広島原爆被害の視察に関連して)広島駅前に沢山の人の居ることは面白くない」という警備上の理由から、警察当局はヤミ市を駅前広場に面した「松原町下の段」に移転させることとしたのである。実際に1月10日にはパターソンが来広していることが確認できるので<sup>17)</sup>、1月上旬(日時は不明)に松原町下の段に移転させたとしてよいであろう。ここでいう「松原町下の段」とは正式の地名ではないが、昭和21年冬から春にかけてこの時期だけ例外的ともいえるようにヤミ市を撮影した写真がかなりあり(写真4、5、6これら以外にも多数ある)、それらによってヤミ市の分布していた位置を図3に示すことができる。この昭和21年1月上旬からを第二期とするが、この集団移転したヤミ市も当初は区画を整然とさせ、一部は簡易な建物化が図られたが、やが

て無秩序に集積するところとなり、駅前広場に露店としてはみ出し、進出するに及んで統制が取れなくなった。従ってこの期間は後述するように昭和21年7月5日までであり、「民有地集団移転・一部駅前広場再集中（露店・屋根付き混在）ヤミ市時代」と称することとする。この時の土地所有は、戦時中の都市計画事業の実施により確保されたが未整備のままであった駅前広場の一部である広島市有地と、無断にあるいは不法に占拠した民有地であった。まさに混乱した時代の産物であった。写真5<sup>18)</sup>においてトタン葺きの大きな建物が中央に存在しているが、これは既に第一期の写真1においてその存在が認められた3棟の大規模な建物の内の1棟と考えられる。この建物が果たしてどのような目的で誰によって建設されたものか、これも謎のままである。

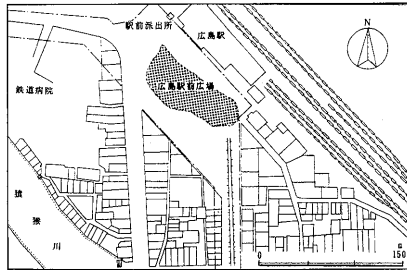


図2 第一期のヤミ市の位置

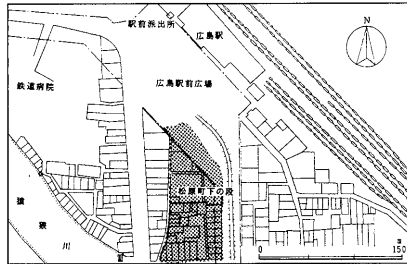


図3 第二期のヤミ市の位置

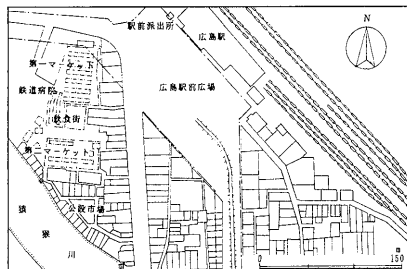


図4 第三期のヤミ市の位置

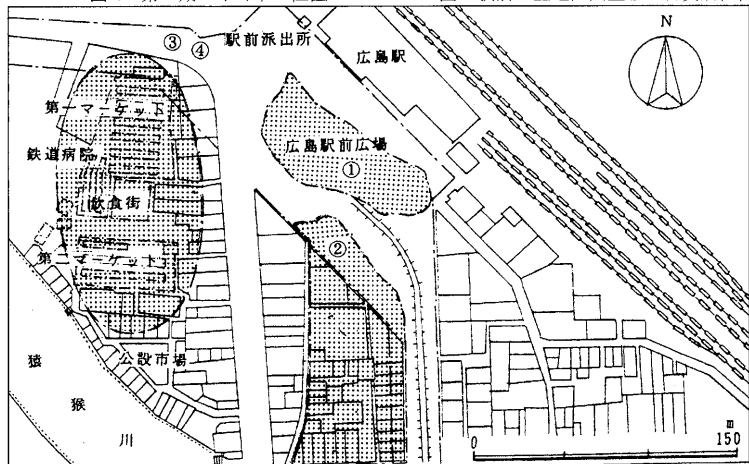


図8 広島駅前におけるヤミ市の立地場所の変遷

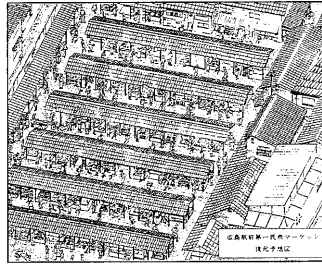


図5 第一民衆マーケット復元想像図

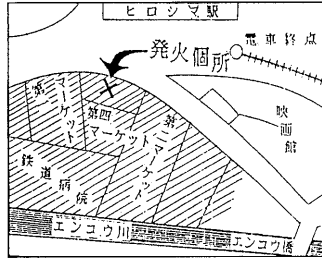


図6 ヤミ市の大火による焼失区域  
「中国新聞」昭和24年3月28日

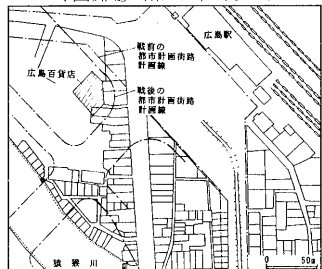


図7 駅前の土地区画整理と百貨店位置

路上にも進出し統制が取れなくなって再び立ち退きを迫られ、郵便局寄りの松原町にマーケット化するよう県と警察から指導された。そして昭和21年7月5日頃に移転完了したのである。この時の状況も上田頼一東警察署長の「青空市場類末記」に、「進駐軍からも再三青空市場の移転方を申し入れて来た。中華人も次から次へと増え、而も以前パターン長官来広の際、整理してよくなっていた駅前広場へドン建築する様になり、青空市場は益々混然雑然として来た。其処で県、市、駅、と協議を開き『広島駅前交通模範地区設定』法を議決し、MPの協力を得て、広島駅前鉄道用地全部の立退きを六月二十二日までに実施する様指令が発せられた。（中略）立退きも予定通り実行されたので更に露店の指定も県と相談の上現在の第一、第二マーケットの場所を指定し構想もすっかり気持ちのよい店にする様指導し、一面松原町下の段の青空市場に立入禁止を告示し遂に七月五日であつたか全部の引越移転が終了したのであつた。」と、記述されている。

昭和21年7月11日付中国新聞によれば、「民衆マーケット開設式」として「広島駅前の青空市場は狭い通路と非衛生的な点で七月五日限り立ち退くやう当局から指令を受け、六百余の露天業者は各業種別に善後策を講じてみたが、従来の機構を改組、広島露天商組合とし選挙の結果助森氏が会長に推され、新たに広島郵便局前広場に木造平家で四百六十余店を収容する民衆マーケットを建設、九日業者、来賓参列し修祓を行ひ明朗な愛される市場、良品廉売主義を目標に開設式を行った。」と民衆マーケットの様子を伝えている。ここで「明朗」とか「民衆」とかの言葉が新しい時代の到来を告げている。この民衆マーケットは、最初に第一民衆マーケット、第二民衆マーケットが造られ、それだけでは不足と少し離れた位置（猿猴橋町）に約300店舗の第三民衆マーケットが同年7月末に建設され、さらに後に第二民衆マーケットの近くに第四マーケットも付置された<sup>19)</sup>。この昭和21年7月からの第三期（24年3月まで）を、「松原町集団移転民衆マーケット時代」と称することとする。この第三期のヤミ市の実態を明らかにするための資料は必ずしも十分ではないが、毎日新聞社が撮影した写真7と昭和22年4月14日米軍が空撮した写真がある。写真7は被爆一周年が近づいて取材し昭和21年7月29日付毎日新聞に、「世界に告ぐ新生『広島』、復興祭をパリ放送局が現地取材」の見出し、「あれから一年、立ち上る広島市、広島駅屋上から望む」の写真キャプションで報道されたものであるが、その写真にはいくつかの貴重な情報が含まれている。これは三枚の連続写真で構成されていて、貼り合わせてパノラマ化すれば駅前広場を展望している。これらによって気付くことは、まず、駅前広場が整理され造園まで施されていることである。次いで松原町にはかなりの程度の建物が建てられていることである。そしてこの中にヤミ市に端を発した民衆マーケットが存在しているのである。第一民衆マーケットの入口が道路側に面して3か所あり、その向こう側に何棟か、多分7、8棟のマーケットが建っているのがわかる。中華料理の店を集めた「中華の店」があり、また壮大な規模の飲食街が見えている。高い煙突とコンクリートの給水塔は、昭和19年に建設され被爆して残った鉄道病院のボイラー室

### 3-3. 第三期 松原町集団移転民衆マーケット時代

集団移転したヤミ市も長くは続かなかつた。ヤミ市が駅前広場や道

等の施設であった。遥かに八丁堀や紙屋町付近の高い建物が見える。また、米軍が空撮した写真によりヤミ市の立地場所と規模がほぼ確認できる。図4のように第一民衆マーケットは8棟と周辺の付属棟数棟、第二民衆マーケットは3棟と周辺の付属棟数棟で構成されていたと判断する。ただし、この期のヤミ市を近接して撮影した写真が見当たらないので、マーケットの細部は不明である。先の写真7や聞き取り調査をもとに、この二つのマーケットを中心としてヤミ市を復元想像して図5のようにスケッチで表現できよう。これらはもちろん木造平屋建で、一棟平均20店舗が横列に並んで背中合わせとなり、従って40店舗が入り、他にマーケットの周辺には片側だけの店舗が配置された。このようにして第一、第二マーケット併せて600~700店舗が営業していて、「広島露天商組合」が結成されていた。そこは被爆までは陸軍移動部隊宿舎などが建っていた軍に関係した土地であったが、公有地ではなく、その跡地付近を無断で集約的に利用したことになる。この土地利用のいきさつや権利関係など、十分に明らかとなっていないとはいえない。なお写真7にも見える中華飲食、料理店街は昭和22年2月18日に火災が発生し、22軒の食堂を全焼してしまうが、マーケットの方には延焼しなかった。また、巨大な飲食街の建物も短期間で消滅してしまうのである。ところで、よく考えてみると、この時期少なくとも路上形式でのヤミ市は解消してマーケット形式になっており、さらに昭和22年中に幾つかの商品は統制が撤廃され自由経済下の時代となっていたので<sup>20)</sup>、本質的な意味でもはやヤミ市とはいえない状況となっていたが、しかし依然として広島駅前の民衆マーケットはヤミ市として受け取られただけでなく、ヤミ市の最も中核的な存在であると判断されたのである。このように民衆マーケットは、その出自においてヤミ市であったことが、人々にヤミ市としてのイメージを強く焼き付けたのである。

### 3-4. 第四期 火災復興・土地区画整理対応過程箱型店舗時代

これらの民衆マーケットがそのまま存続することを妨げたのは、昭和24年3月27日に発生した大火災であった。昭和24年3月28日付「中国新聞」には、「被災実に七三八戸、商店街一瞬にして消ゆ、猛火・広島駅前を総なめ」の見出しで、「二十七日午後三時五十分頃出火して、マーケット・食堂街、広島鉄道病院を全焼し、被災家屋七百三十八戸、被災者千七百人」と報道された。図6に示すように松原町のマーケットは悉く灰燼に帰し、この中に第一、第二民衆マーケットと、民衆マーケット設置当初にはなかった第四マーケットも含まれたのである。バラック状の燃え易い建物が多く、一方で水利も悪く消火に手間取ったことが災いしたとされるが、人目の多い日曜日昼間の火災であった。昭和24年3月29日付中国新聞に「ピカ当時に逆戻り」の見出しの記事の中に掲載された写真は、火災の翌日3月28日に撮影された連続写真(写真8)である。これには、2万坪とされる全焼地域や、鉄道病院の煙突と給水塔などが無惨な姿を晒している。この駅前付近一帯は戦災復興土地区画整理が施行される予定となっていたので、焼け跡に本建築はもちろん仮建築も許さない方針となり、広島県建築課は焼け跡に縄を張って、建築を禁止する旨発表している。しかし、商業活動までを完全に禁止するわけにはいかなかったので、広島市は「都市計画の駅前50メートル道路に間口一間程度の移動式露店を市の費用でつくり、これを被災民の希望者に貸与して生計援助の対策とする。」(昭和24年3月29日付中国新聞)方針とした。そこで、駅前に移動可能な店舗として箱型店舗が用意されたのである。

第一、第二マーケットの被災者は当初、火災に便乗した都市計画には反対するという姿勢を示したが、従来の民衆マーケットのままでも復旧することにも問題があり、結果的には駅前にデパートを建設する方針に落ち着いた。それまでを箱型店舗でしのごこととなり、店舗が駅前付近に並ぶこととなったのである(写真9)。その位置は第三期のヤミ市時代とほぼ同位置と路上であったと推測される。この昭和24年3月から昭和27年2月までを第四期「火災復興・土地区画整理対応過程箱型店舗時代」と称することとする。そして民衆マーケット形式のヤミ市を清算したのがこの大火災であったとすることができる。



写真1 広島駅の空中写真 昭和20年9月~11月 (H.J. ピーターソン撮影)

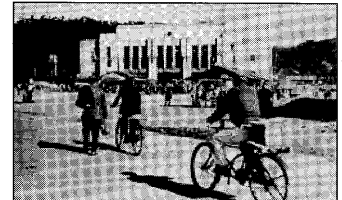


写真2 広島駅前付近昭和20年11月 (佐々木雄一郎撮影)



写真3 広島駅前ヤミ市 昭和20年12月ごろ (朝日新聞社提供)

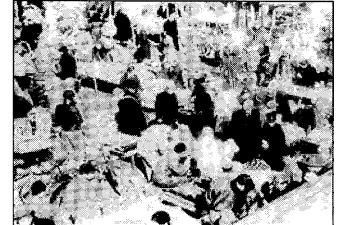


写真4 広島駅前付近のヤミ市 昭和21年 (朝日新聞社提供)

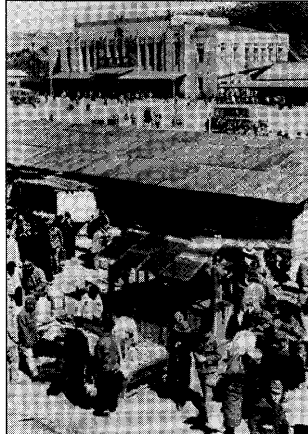


写真5 駅前広場付近のヤミ市 昭和21年冬~春 (山端甫介撮影)



写真6 松原町下の段でのヤミ市 昭和21年冬~春 (山端甫介撮影)

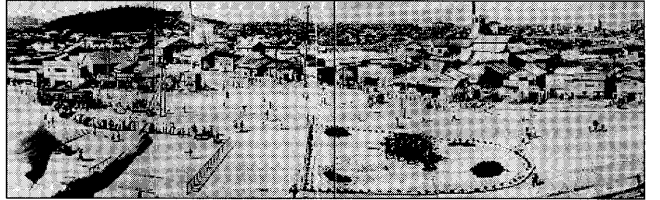


写真7 広島駅舎屋上からのパノラマ 昭和21年7月 (毎日新聞社提供)

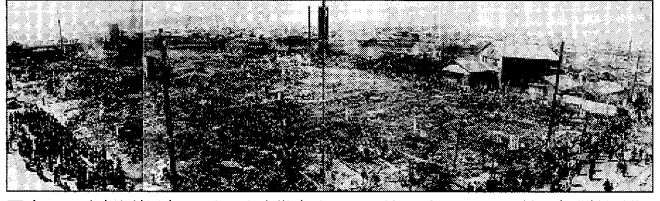


写真8 広島駅前民衆マーケット火災跡パノラマ 昭和24年3月28日 (中国新聞社提供)

### 3-5. 第五期 共同店舗化・土地区画整理進捗・駅前広場周辺整備時代

確かに土地区画整理後を想定したとき、もはや露天商的な店舗経営

は許されるはずもなかった。そこで共同店舗を企画し、土地区画整理の換地設計で集合換地化した市有地に地下一階・地上三階建の広島百貨店を計画した(図7)。当初は地下1階、地上6階の総合ビルとして構想され、4階には大衆食堂とホテルグリル、5階には高級ホテル、6階には簡易ホテル、浴場、大集会室を設ける計画であったが、建設費その他の理由により縮小されて3階建となり、構造的に将来増築可能なものとした。設計は戦後の広島で活躍した暁設計事務所であった。

昭和27年2月に竣工し、同月20日に開店した広島百貨店は、広島駅前の中心的なヤミ市の終焉を象徴するものであり、かつ広島戦後を典型的に表現するものとなった。24年の大火以後模索された店舗形態がこのような形で決着がつけられたのである。写真10は新築された広島百貨店であり、資料1は開店時の新聞広告である。かくて、広島百貨店は開店後しばらくは賑わいを見せた。広島百貨店は完成したが、なおいくつかの問題が残されていた。例えば駅前大橋を架橋しても、駅前第二マーケット55業者がその前面をふさいで通行を妨げていた。広島市東部復興事務所が立ち退きを迫り取壊しにかかったのは、昭和28年10月であった。ステーションシネマ通りには駅前区画整理の進捗を妨げる50戸の不法建築が存在していたが、その整理に取りかかったのは昭和30年5月のことであった(写真11)。駅前大橋は昭和31年8月に開通し、駅前大通りは幅員50メートルで広島駅正面に直結した。

このようにヤミ市の残存形質により、広島駅前の土地区画整理が大幅に遅延したということになる。土地区画整理が進捗したのは昭和30年代であり、被爆後混乱に混乱を重ねた広島駅前付近もようやく、收拾される状態に至ったのである。昭和38年頃撮影した写真を見ると、広島駅と駅前付近が復興過程の最終段階を迎えていることを表現している。その後、被爆した旧駅舎も昭和39年に取り壊され役目を終えた。同年5月に店舗やホテル、駐車場等を並存した広島民衆駅として着工され、41年12月に開業し、広島の玄関口は面目を一新するところとなった。

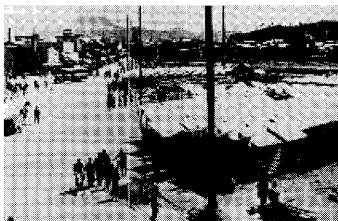


写真9 広島駅前付近に並べられた箱型店舗  
昭和24年(中国新聞社提供)

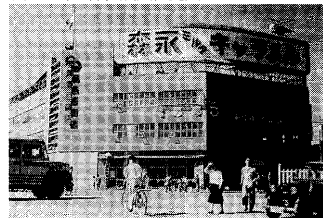


写真10 広島駅前に完成した広島百貨店  
27年10月(広島市広報課提供)



資料1 広島百貨店開店広告(中国新聞昭和27年2月18日)



写真11 広島駅前広場とステーションシネマ  
通り付近昭和30年7月(中国新聞社提供)

以上より第五期(昭和40年代まで)はヤミ市のつながりであれば「共同店舗化時代」であり、駅前地区全体であれば「土地区画整理進捗・駅前広場周辺整備時代」と名付けることができよう。第五期以後に関しては省略するが、土地区画整理が進捗し駅前広場周辺が整備されたのに、それでも駅前の整備課題は依然として解決したとは考えられな

かったということであり、昭和50年代以降も駅前再開発をめぐって模索が展開され続けているということだけを触れておこう。このようなことになったのも、かつてヤミ市が存在したこと、ヤミ市が消滅してもヤミ市の形質を多少とも引き継いでいることなどが、今なお影響を及ぼしているといえるのかもしれない。

#### 4. ヤミ市と市民の関係および商業活動

ヤミ市について、ヤミ市と市民の関係、あるいはヤミ市における商業活動等の側面から考察してみよう。

まず、ヤミ市に市民が群がり、そこで売買が行われるということは、当時の市民がヤミ市を必要としていたということができる。昭和20年12月14日付中国新聞によれば、ヤミ市では「迷子が出るという雑踏ぶり」と描写しており、あわせて「このごろさかんに鮮魚類が出はじめたが、これも㊟撤廃の功績か、しかしその高いこと、本当に眼が飛び出るほどだ。しかし腐りやすいものだけに夕暮ともなるとぐんぐん下る」とヤミ市の高さを指摘しながらもヤミ市の隆盛を伝えている。とはいえ、ヤミ市にも例外的な日もあったのである。モラトリアム施行といわれた昭和21年3月3日の新円切替の日の状況は同年3月4日付中国新聞で「青空市場は真空状態だ」と表現され、閑散としたヤミ市の写真が添えられている。ちなみに、梶山季之はその著『小説GHQ』

(光文社、昭和51年)において、「昭和二十一年三月三日は、雪にあげた。…雪に包まれた銀座へ出てみると、露天商は一軒も店を出していない。商店や食堂にも、『本日休業』の貼紙を出した店が多かった。」<sup>21)</sup>とさりげなく書いている。しかし、新円切替後のヤミ市衰退は一時的なもので、実際には壊滅どころか予想以上の繁盛を続け、昭和21年4月1日付中国新聞では、「巷の新円は完全に自由市場(ヤミ市のこと)に吸収された形」、「止めども止まらぬインフレの行進、広島駅前、横川駅前、己斐駅前、天満橋畔の自由市場でさかんに走踏をやらかしている、この行進こんどはいつれを指向するのやら」といった表現が取られている。ところが、全ての市民がヤミ市を歓迎し、利用していたのではない。ヤミ市での物資は高嶺の花で、多くの人はヤミ市で欲しいものがあってもただ見るだけで、なかなか手が出なかったという。食べ物や衣服に困窮極まったときに、ぎりぎりの選択をしなければならぬ金をはたいて買ったり、大事な品物と物々交換したのであった。

次に、行政側がヤミ市に対して無策でいたわけではなかったということである。その取られた措置の一つが、ヤミ市の取締であり、もう一つが公設市場の設置であった。ヤミ市に対する取締は規則の制定や指令等の発令と手入れと呼ばれる措置であった。全国的にも内務省指令があり、広島県独自でも取締規則を強化している。ただし、当初の取締はそれほど、強硬なものではなかった。昭和20年12月17日付で「關市の指導取締に関する件」において内務省の方針を傳達しているが、ここではヤミ市を否定するのではなく、正常な取引の市場へ移行するよう指導するとされている。昭和21年1月12日付中国新聞では、昭和21年1月には広島市内の駅前、横川、己斐、天満橋、字品電鉄終点の5箇所の市場責任者を、明朗健全な自由市場として発展してもらいたい意向のもとに県防犯課に集めた結果、「気分新たに民衆的な自由市場として発足することを申合」したと報じている。このようにこの頃「ヤミ市を『自由市場』と改名し育成助長すべし」との考え方もあった。一方GHQ側からのヤミ市取締の要請は次第に容赦のないものとなって

いった。止まるところ知らないヤミ市の隆盛は、治安問題にまで暗い影を投げかけ、GHQを刺激していたのである。広島県では独自に昭和21年6月に「露店営業規則」を制定し、ヤミ市取締の法的根拠とし、それと引き替えに露店営業を許可制とし営業上の諸義務を課したのである。政府はGHQの意向を受けて同年8月に「闇市場閉鎖の指令」を出し翌年2月にも再度指令を発したのである。早くから食料品組合はヤミ市をとり取締よう警察に要請しており（昭和20年12月1日付中国新聞）、新聞の論調も次第にヤミ市取締を強く主張するところとなり、遂には「ヤミ商人を追放せよ」という記事（昭和23年2月6日付中国新聞）となって現れている。広島におけるヤミ市の手入れはまず、検察当局が昭和21年2月2、3、4日と3日にわたる第一次手入れを主として繊維製品に対して行い、次いで4月2日に第二次手入れとなった。さらに政府の食糧非常事態宣言、社会秩序保持声明、広島県の露店営業規則に基づいて6月13日のMPを交えての第三次手入れがなされ、8月1日にはヤミ市撲滅をねらう全国的検挙に呼応して広島での第四次手入れが行われたのである。いわゆる「八・一肅正」といわれる徹底したものであり、全国的にはこの日を境にヤミ市は少しずつ姿を変え、あるいは衰退に向かうとされている。その後も何回かの手入れがなされており、昭和21年10月2日には夜間に経済違反取締を実施したのである（昭和21年10月4日付中国新聞）。この間、昭和21年5月9日には逆に駅前前のヤミ市商人例の数百人が、県防犯課など当局に大挙して押し掛け、統制下では食っていけないと陳情する一幕もあった（昭和21年8月6日付中国新聞）。露店営業規則と手入れはヤミ市の存続基盤に大きな打撃を与え、昭和22年5月に「露店営業規則」を廃止して制定された「露店営業取締規則」によって旧来のヤミ市は終息するに至ったのである。

行政側が講じたもう一つの措置が公設市場の設置であった。昭和21年1月12日付中国新聞で「これで闇市に対抗、広島に五つの公設市場」という見出しで「闇市場に対抗し低額豊富な物資を市民に提供するために広島市では近く市内各所に公設市場を設置することとなった。現在のところ宇品、広島駅前、八丁堀、紙屋町、己斐の五カ所が予定地とされており…」と報じられ、他に横川も候補地に挙げられていた。実際には、6月5日、己斐（19店舗）に、7月15日から月末にかけて横川（25店舗）、鷹野橋（24店舗）、皆実（15店舗）に、11月、広島駅前の松原町（24店舗）にそれぞれ公設市場が設けられた。しかし、公設市場が直ちにヤミ市を駆逐するところまではいかなかった。この状況を報じたのが、昭和21年5月17日付中国新聞と昭和21年6月12日付中国新聞であった。前者では「ハテ不思議・安いと売れぬ、広島公設市場いたって閑散の巻」という見出しで「大衆はいつまでも暗い裏街的な闇市場の退廃的雰囲気の方に引きつけられるのか…」と疑問を投げかけつつヤミ市の隆盛を伝え、後者では「どちらに軍配あがる、取り組んだ闇市と公設市場、主婦は公設が好き、閑人の人気は断然闇市」という見出しで、ヤミ市を批判しつつもヤミ市の持つ人気に触れているのである。このように当初、公設市場に対しては優位を保ったヤミ市であるが、繁華街との競争において最終的に敗退することとなる。八丁堀、本通りが昭和24年頃より復興が進み、ヤミ市から次第に買い物客は奪われていくのである。全国的にみても、常設店舗の繁華街が復興するにつれて優位さを盛り返していき、多くのヤミ市から市民は次第に遠のいていった。かつては闇であり、不正なものとしてされた闇市が、闇ではなく不正でもないヤミ市として存在したのは東の間であっ

たことになる。市民はやがてヤミ市を必要としなくなったのである。しかし、この東の間のことにせよ、そこで多くの物資が売買されたのである。当初は、家庭内で眠っていた物資、軍需物資、横流し物資などであったが、やがて収穫され生産された物資が増えていった。このことは、ヤミ市が単に商行為である以上に、流通と生産を促進する役割を果たしたことを意味するのである。

次いで、広島駅前ヤミ市の重大な出来事として火災の発生を挙げなければならない。昭和24年3月27日の駅前大火については既に述べたところであるが、それ以外にも度々火災に遭遇している。それらを駅前付近の火災を含めて表2にまとめているが、このように、度々新聞紙上ににぎわしたのである。それはあたかも、基町の原爆スラムと呼ばれた地区における状況と同様であった。池袋のヤミ市地区では、火災に対して極めて警戒的な姿勢で対応し失火がなかったことと対照的であった。

表2 広島駅前付近火災の状況のまとめ

出火の時期	火災場所	被害の程度
昭和22年2月18日 午後10時頃	民衆マーケット付近 の中華飲食、料理店街	食堂街2軒全焼、1軒半焼（民衆マーケットには被害なし）
昭和24年3月27日午後	民衆マーケットとその 付近	一般民家160戸、第1・第2マーケット等18棟508軒、広島鉄道病院、全焼地帯2万坪（1町四方説もある）、被災者1000余（1700名説も）
昭和30年4月8日朝	松原町付近	22戸、100世帯、延べ816坪を全半焼
昭和31年2月25日早晩	松原町付近	17世帯、300坪
昭和31年7月30日午後	荒神町、猿渡町付近	約70戸、80世帯、約500坪
昭和32年2月26日 午後10時頃	猿渡町、荒神町付近	41戸全焼、12戸半焼、70世帯以上被災、パルクの商店や特飲店

注：表2は昭和20年から昭和32年までの「中国新聞」において報じられたものを参考に作成した。

ヤミ市は、戦後の商業の一形態であり、その後様々な形態に変わっていったことに触れておこう。ヤミ市営業から、土地や建物を確保して一般の商店に衣替えしていった商人、集団的に共同店舗化していった商人、特に大規模店に発展していった商人、特異な商業形態に発展的に解消した商人、などがある。例えば、大阪の天神町六丁目（いわゆる天六）のように、当初不法に占拠していた土地を地主から正当に取得し、後に自発的な再開発を可能とした場合もあった。アメ横のように相当長期にわたって特異な商業形態として受け入れられた場合は、それなりの対応があつたことであつた。ヤミ市が、都市における屋台の形態につながるものとして機能した場合のあることも指摘しておこう。もちろん屋台の発祥は古く、特に露店で飲食物を提供するという行為は戦前の祭礼時の夜店や「よなきそば」といった商習慣においてもみられたが、戦後はヤミ市によって一定の場所が商業的に繁栄することが明確となり、ヤミ市の内の飲食物提供の露店が、その場所を追われても路上などその付近で屋台としての形態に移行していったのであり、戦後の屋台発生の要因となったのである。このように、もはやヤミ市そのものは存在しないが、現在なお都市のいくつかの局面でヤミ市の発展形態、残照形質等を見出すことができるのである。

## 5. むすび

以上より広島駅前のヤミ市について時代区分すれば、①昭和20年8月下旬から21年1月上旬までを「自然発生の駅前広場露店ヤミ市時代」、②21年7月5日までを「民有地（松原町下の段）集団移転・一部駅前広場再集中（露店・屋根付き混在）ヤミ市時代」、③24年3月までを「松原町集団移転民衆マーケット時代」、④27年2月までを「火災復興・土地区画整理対応過程箱型店舗時代」となる。これら

の全体的な位置関係を示したのが図8であり、広島のアミ市関連で年表化すれば表3のようになる。一応この第四期でアミ市そのものは消滅するが、広島駅前を整備がらみでもう一期つけ加えるならば、昭和40年代までを「共同店舗化」かつ「土地区画整理進捗・駅前広場周辺整備時代」とすることができよう。

表3 広島駅前アミ市関連年表

昭和	広島アミ市の動き (広島駅前を中心に)	復興の動き
20年	8月 広島駅前広場で露店出現、徐々に市場を形成。 12月 物々交換等頂上規則制定。	8月 原爆投下。 9月 林崎台風。
21年	1月 低額・豊富な物資を市民に提供するため公共市場開設を計画。 1月 パターソン来広。 2月 アミ市に対する市内初の取締。食糧緊急措置令、隠匿物資等緊急措置令制定。 3月 物産館前、水産物市場制定。県警、広島駅前市場の責任者を呼び戻す。自由市場を促す。 5月 食糧メーデー。東署管内のアミ市取締実施。 6月 市営の生活必須物資市場、市内5ヶ所へ開設。 広島駅前等のアミ市に総手入れ。県、露店営業規則制定。県毎月3日分の主食配給停止。 7月 広島駅前露店業者、広島露店商組合を発足させ、郵便局前広場に460余店を収容する民衆マーケットを開店。 8月 全国一斉アミ市取締。 10月 アミ市に夜間の取締実施。 11月 広島駅前松原町の一角に公設市場開設。	1月 広島市復興局設置。 2月 第1回広島市復興審議会開催。 3月 県復興事務所開設。 5月 第10回広島市復興審議会で都市計画街路決定。 6月 県・市で主要地域の整地及び清楚作業着手。幹線街路の打ち開始。 8月 広島市復興祭開催。 9月 広島復興都市計画(街路・公園)決定。
22年	2月 広島駅前中華食堂火災。 5月 市内5ヶ所の公設市場で、全商品5分引き。県、露店取締規則制定。 7月 農林省令により一部取締撤廃。 10月 広島駅前第3民衆マーケット付近の取締り実施。衣料品品切符制開始。	1月 市復興局東部復興事務所開設。 8月 第1回平和祭開催、市長平和宣言。
23年	7月 東広島商店街連盟、広島駅前の区画整理に反対を決議。	1月 県被災学校復興費くじ売り出し。
24年	3月 広島駅前繁華街で大火、マーケット・食堂街や広島鉄道病院が全焼。被災家屋約738戸、被災者数約1,700人。 4月 大火の早期復興を期し、広島駅前復興促進連盟結成。大火の暫定措置として、箱型マーケットが開店。 9月 衣料品品切符制を無期限停止。	5月 マッカーサー道路誕生。 7月 市営の昭和町平和アパート完成。 8月 広島平和記念都市建設法公布。 10月 広島中央市場開場。
27年	2月 広島百貨店開店。	3月 広島平和記念都市建設計画決定。

まず広島駅前のアミ市の特徴をまとめると、①アミ市の場所を度々移動し、あるいは移動させられていること、②火災がその存続形態に決定的な影響を及ぼしたこと、③発生当初からしばらくすると、アミ市が度々手入れ・取締され、マスコミからも批判の対象となるなど必ずしも認知された存在とならなかったこと、④手入れや公設市場政策にもかかわらずアミ市はしばらくは根強く存続すること、そして重要なポイントとして、⑤アミ市の営業によって流通が進み農漁業、工業などの生産を促すという意味で戦後復興への初期効果をもたらし、戦後復興の原点となったこと、⑥前記⑤の通りではあるが駅前アミ市が広島復興への初速を与えたにとどまりその後は逆に駅前整備課題を残す存在となったこと、などである。

次にアミ市を市民側から捉えると、①当初のアミ市は市民にとって基本的に必要な存在であったこと、②しかし高値がつくと多くの市民には手が出ない品物となったこと、③とはいえ売の方も買い手がつかないと商売にならないのでまさに需要と供給の関係で値段が決まったこと、④ある時期までは公設市場よりもアミ市の方に人気が集まり繁昌したこと、⑤しかし最終的にはアミ市よりも復興を果たした八丁堀、紙屋町での買い物を選択していくこと、などである。

最後に、なぜ広島駅前にアミ市が発生したかに関しては、既に言及されている部分もあるのでそれを引用して締めくくりとしたい。それは、『広島市中央市場三十年史』(広島市、昭和55年27頁)におい

て、「駅前のほか横川、己斐、宇品などに自然発生的にアミ市が誕生した。しかし駅前アミ市が最大だった。」ことにも触れて、①国鉄が唯一の交通機関であったこと、②背後地との交通の接点であったこと、の二点を挙げている。ここでさらに理由を付け加えるならば、③適当な広場や土地が存在したこと、④自然発生的な段階からアミ市を組織化する段階へと展開したこと、をつけ加える必要がある。アミ市の実態に関しては、なお多くの課題を残しており、特にアミ市の空間構成や商業活動の実態については今後の取り組みが必要である。

謝辞

本考察は、広島市教育委員会文化課の進めている博物館資料調査の一環としても取り組んだものであり、広島都市生活研究会を通して調査や資料収集の支援を得ている。考察にあたっては、多くの関係者から聞き取り調査に協力を得たことを感謝する。また、本論文には広島大学卒業論文として取り組んだ中田直政君との共同研究に基づく内容を含んでいることを付記する。

注

- 1) 新聞報道などで昭和20年11月頃までは「開業者」「開市場」「青空市場」という表現を使用しており、政策的に「自由市場」と表現している場合もあったが、次第に「開市」という表現に落ち着き、朝日新聞では、昭和21年7月頃より「アミ市」という表現をほぼ定着させていた。
- 2) 松平誠・星野明『也袋「アミ市」の実態—第二次世界大戦後の戦災復興マーケット』、『立教大学社会学部研究紀要応用社会学研究』第25集、昭和59年)。松平誠『アミ市』(ドメス出版、昭和60年)。松平誠・木谷薫『アミ市の生活学』(生活学第2冊、昭和61年)他。
- 3) 中国新聞社編『写真でみる広島あゝのころ』中国新聞社昭和52年、129頁。
- 4) 昭和12年撮影の駅前郵便局と駅前郵便局、物産館の写真は、中国新聞社編『写真でみる広島あゝのころ』中国新聞社昭和52年、122頁の「広島駅前あゝのころ」に掲載されている。
- 5) 佐々木雄一郎『ヒロシマは生きていた—佐々木雄一郎の記録』毎日新聞社、昭和52年。この写真には「一九四五 S20国鉄広島駅舎の天井は落ち、ホームの屋根は吹き飛んだ」というキャプションが付されている。
- 6) 上田頼一『青空市場未記』(警察週刊誌「いづみ」昭和21年11月号より転載、広島県警察史編集委員会編『新編広島県警察史』昭和二十九年、PP961-964所収)
- 7) 大佐古一郎『広島昭和二十年』(中公新書、昭和五十年、217頁)によれば、「8月30日(木)曇り、ときどきにオカ雨。午後、県庁前に借りた自転車に乗って、広島駅前の開市と市内のバラック取材に行く」と記述している。
- 8) 『広島原爆被災誌』第二巻 広島市 昭和四十六年 4頁。
- 9) 前掲書 (8) 9頁。
- 10) 『広島新史』経済編 広島市 昭和五十九年 30頁。
- 11) 前掲書 (8) 851頁。
- 12) 前掲書 (8) 9頁。
- 13) 広島県警察史編集委員会編『新編広島県警察史』(広島県警察連絡協議会 昭和29年951頁)では表現をかなり変えているが、ほぼ同文の引用がなされている。
- 14) 新聞紙上に掲載されたかどうか現段階では不明で、写真データとして「広島駅前のアミ市S20・12・12調査部」とあり、12月12日が撮影日が資料室への保管日も不明。
- 15) これは東京での撮影規制の情報であるが、焼跡やアミマーケットなどを映画にしようとして撮影することはGHQの検閲制度によって禁じられていたという(山本嘉次郎『カソドオヤ微録』『目撃者が語る昭和史』第八巻 八・一五終戦』新人物往來社 平成元年 292-293頁)。
- 16) 『広島原爆』撮影された写真が『原子爆弾の記録』(三省堂昭和55年102頁)に掲載され、「広島駅前付近、当時山陽本線のほかに芸備・宇品・呉線の起点駅であった。右端の上部は袋川、中部の白い羽が駅前広場。」というキャプションが付されている。
- 17) 昭和21年1月11日付中国新聞によると「パターソン米陸軍長官ら六人、広島を視察を視察」という見出しで来広を報道している。
- 18) ただし、この写真と同じものが、別々の文献で異なる説明がなされている。すなわち、『広島新史』市民生活編(広島市 昭和58年 写真3)では「広島駅前並んだ開市(21年)」とされており、昭和21年の冬〜春と考えられているが、『広島・長崎原子爆弾の記録』(子どもたちに世界に!被爆の記録を贈る会編著 昭和五十九年 310頁)では「広島駅本館ともようやく窓ガラスがはめられ、改修が終わった。駅前バラック建てながら商店も開き、アミ市が活気を示していた(1948年3月頃)。撮影「山端清介」とされており、昭和23年ということになっている。昭和23年時点でのこの位置でのアミ市の存在は確認できないので撮影時期は前者の『広島新史』市民生活編の昭和21年説を採用するが、写真「山端清介」が撮影した一連の写真と同一ネガの中に入り、撮影者は後者の『広島・長崎原子爆弾の記録』にある山端と考えられる。従って後者のキャプションは正しく、撮影時期だけが「1948年」でなく「1946年」の間違いと考えられる。
- 19) 後の昭和24年3月に発生した火災時の報道記事から、第四民衆マーケットの存在したことが確認できる。
- 20) 統制情報局一斉になされたのではなく、例えば昭和20年10月から11月にかけて水産物、青果物、食肉、鶏卵、鮮魚貝等一部の食料品について統制を撤廃したが、その効果は一時的で逆効果となり、再び統制下におくなどの政策的な紆余曲折があった。昭和22年7月31日に青果物の統制撤廃となったが、鮮魚、食肉は除外され、10月段階ではなお魚類の統制強化を行っていた。そして米穀もその後も長く統制下に置かれた。
- 21) 梶山季之『小説GHQ』光文社 昭和51年 265頁。

(2007年12月3日原稿受理、2008年3月11日採用決定)